



# 僕の音楽人生

石川 滋

昭和57年卒業（34回生）

漠然とではあるが音楽の道へ進もうと決めたのは、他でもない新宿高校在学中であった。音楽家の家系に生まれたにもかかわらず、幼い頃祖母にピアノの手ほどきをうけた以外、当時の僕は音楽教育を受けていなかったが、同級生の勧めでエレキベースをかじりバンドをやりはじめ、最初はジャズ・フュージョン、そしてクラシック音楽へと僕の興味、情熱は急速に深まった。その過程でふたりの巨匠マイルス・デイビスとパブロ・カザルスのLPレコードを聴き始め、衝撃を受けた。マイルスはジャズの、カザルスはクラシックの巨匠だ。この二人の音楽に触れたことが僕の音楽に対する「確信」を決定づけた。この世にこんな素晴らしいものがあるなら、人生捨てたものではないとはじめて思えた。別に自殺しようなどと考えていたわけではなかったが、音楽に「生きる」意味のようなものを感じたのだろう。

当時の僕は、授業にもまったく身が入らず、出席すればまだ良い方で、しょっちゅうさぼっていた。学校そっちのけで、自分にとっての人生の意味、生きる意味を懸命に探していたのだ。今なき父は当時住友商事のバリバリの商社マンであり、特別取り柄のない僕は将来サラリーマンになって父のように毎日通勤するのかとも考えたが、どうしてもその姿が自分の心にイメージできなかった。女の子にももてず、冴えない思春期だったが、とにかく未来の人生をかける何かを探し求めていたのだ。その何かは音楽であることに気づくのにそう時間はかからなかった。

余談だが、一年生の時僕はハンドボール部に所属していた。厳しい部活で中々の強豪校であった。音楽をする時間ももっとほしかった僕は、学年の終わりに顧問のS先生に退部の希望を伝えた。毎日の厳しい指導から、かなりビビりながら行ったのだから、予想に反し、残念なお顔はなされたものの温かく送り出してくれた。

部活をやめてからは以前にも増して音楽にのめり込み、食べる寝る以外は音楽漬け、へたすりゃ食べながらさえ楽器をいじってるような毎日であった。それまで眠っていた火山が噴火したようなエネルギーであった。高校在学中勉強などしたこともなかった僕の成績は当然最低ランク。大学進学など無理なレベルだったが、一浪してなんとか慶応に入った。音大に行かなかった理由はいくつかあるが、その中には、普通大学を出て音楽家になるのも格好いいじゃんという軽はずみなものもあった。当時から好きだった指揮者レナード・バーンスタインやチェリストのヨー・ヨー・マもハーバード出身だ。日本版のそれになってやろうという分不相応な夢であった。

現実には、音楽を遅く始めたレイトスターターである自分が音楽で飯を食えるようになるという自信は全くなかった。まずは普通大学に入り、どうするかはそれから決めようと考えた。大学三年の時に癌のため50という若さで父が逝ってしまい、就職するかどうか最終決断を迫られた。その時点ですでに桐朋音大のディプロマに在籍していた僕は、ふたつの質問を自分にした。ひとつは、オマエが今後の人生でやりたいことは何か？ふたつ目は、オマエが自分を一番高く世の中に売れるものは何か？このふたつであった。どれだけ考えても、答は「音楽」であった。幸運なことに、僕の場合好きなこと、やりたいことと得意なことが一致したということだったのである。一度しかない人生、音楽に賭けようと思った。

その後アメリカへ留学し、25年海外で活動をし、2013年日本に完全帰国した。思えば、新宿高校時代のあの噴火のエネルギーにのって一気に来てしまった僕の音楽人生だ。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）